

記憶から記録へ

—イメージの図化を通して—

鈴木 賢一・溝口 正人

1 戦後の生活環境を考える—公開講座での試み—

戦後の経済成長期を生き抜いてきた人々の多くは、進学・就職あるいは結婚など、自分自身と家族のさまざまなライフサイクルの節目に、その時にふさわしい場所と住まいを求めて、土地を移り、新しい住まいを求めてきた。今日私たちが目にする住まい、まちの姿は、このようなひとりひとりの歴史の積み重ねに他ならない。文化が歴史の積み重ねによって生まれるものとしたら、住まい、まちの姿は、文化を表象する最も身近な存在といえるだろう。

しかしながら戦後のめまぐるしい社会の変化によって、つい昨日まで当たり前のものとしてきた風景さえもが眼前から消え去り、記憶のなかだけのものになってしまう。昭和という時代も歴史としての過去となり、戦後という言葉さえもが死語となりつつあるかにみえる。このような状況のもと、歴史の当事者でもある私たちが、かつての自らの生活を振り返り、何が変わり、何が変わらなかったのかを確認することは、それなりの意味を持っているのではないだろうか。

平成12年度の芸術工学部市民公開講座では、「街づくりを考える」

というテーマのもと、「まちの変化、生活の変化～住環境の変遷からみた自分史作成ワークショップ～」と題して、受講者が参加するワークショップ形式の講座を開講した。この講座は、受講者が各自の居住地と住まいの変遷を振り返り、年表と平面図に整理することによって、住環境が人生の舞台としてどのような役割を果たしてきたかを見直してみようという試みである。

参加者の年齢構成は23才から72才までで、戦前生まれが過半を占めた。ワークショップで行った作業は、各自の居住地、住まいと家族構成の変遷を年表にまとめること、今まで過ごしてきた住まいの中で最も印象に残っている住まいについて、平面図を描いてみること、の二つである。

試行的な取り組みでもあり、参加者に戸惑いは隠せなかったようである。ただし図化してみると、記憶では確かであるはずの情景が、整合しない、思い出せない、あるいは忘れていた印象がよみがえるなど、思いがけない事実が明らかとなり、参加者には、住まいの記憶から生活環境を振り返るきっかけとはなったのではなかろうか。そして、このような取り組みをさまざまな世代とともに行っていくことの可能性について確認できた点で、収穫があったと評価してよいだろう。

そもそも、人は、原風景としての自分の過ごしてきた環境をどれほど記憶しているものか、記憶していないものか。あるいは記憶された事柄は、住環境として、歴史的にみて、どんな意味を持っているのか。身の回りの環境は、人にどのように働きかけるものだろうか。鈴木は日本や欧米の子どもをとりまく環境を、溝口は日本や中国の集落、住宅の変遷を研究の対象としてきたが、実は、これらの点が、私たちの今までのさまざまな活動を貫く、重要な関心事でもある。

そのなかでも本論では、記憶を定着させる作業の持つ意味と可能性

について、事例的に考察してみることとしたい。

2 津田左右吉の住まいの記憶

昭和24年に文化勲章を受章した歴史学者の津田左右吉(1873-1961)は、戦前、皇国史観に反するとして著作が発禁処分とされながらも、史実の解明を追求した研究態度を貫いたことで知られている。津田は明治6年に岐阜県加茂郡栃井村(現在の美濃加茂市下米田町)で生まれた。津田家は、尾張藩家老をつとめる竹腰家配下の武士である。江戸詰めであった左右吉の父、藤馬が明治維新後に帰名し、明治2年に竹腰家の旧領である栃井村に居を定めたという。

津田は、生誕以後、尋常小学校を卒業して名古屋の私塾に進学するまでを、この栃井村で過ごした。栃井村での少年時代を「自叙傳」に記しており¹⁾、当時の東濃農村部の暮らしとともに、津田家の住まいを自身の記憶によりつづっている。津田は13才で名古屋に出ているから、記憶の範囲はおおよそ明治10年代となる。以下では、自らの住まいが、津田自身にはどのように記憶されていたかを、現存する生家と自叙伝の記述の比較からみてみよう。

栃井村定住の当初、津田家は「ひやくしょうや」を借りて住んでいたが、津田の記憶する頃には、父、藤馬が新築した家屋に移り住んだ。

「ナゴヤのもとのやしきと同じやうに建てるつもりであったさうだが、おもや一けんができただけで、あとまわしにした門も塀も長屋も建たずにしまひ、外から見たところでは、近所の「ひやくしょうや」とそうひどくはかはらぬ家づくりであった」という。

この津田左右吉の生家は、大正11年に津田家の手を離れた後、さまざまな改造が施されつつも、最近まで当初の敷地に現存していた。取

り壊し時点では屋根が瓦葺きに変わっていたが、昭和35年の写真が示すように、外観からみる限りは周辺の農家と何ら変わるところがない草葺き屋根の建物である（図-1、図-2）。平成9年に行った現状確認の建築的な調査と聞き取り、および解体部材の検討から、当初の平面が復原できる（図-3）。外観とは対照的に、復原される平面は、いくぶん特異なものとなっている²⁾。

濃尾地方の農家の間取りは、図-1の現状平面のような「整形四間取り」と呼ばれる居室が田の字にならぶ形式か、さらに奥に居室が2室付加した「六間取り」にほぼ集約できる。全国的にみても普遍性を持つ間取りである。作業空間でもある「ニワ」とよばれる土間が建物の間口広く取られ、その一部に牛屋（ウシヤ）が設けられる場合がある。一方、津田家の場合、土間部分は一般農家の半分程の広さしかなく、牛屋もない。そして津田家のように土間がさほど広くない形式は、武家住宅の一般的な形式でもある。この住まいについての自叙伝の記述は興味深い。いささか長いが以下に引用しよう。

「どの家もみな藁ぶきのひらやであった。私の家は、やはり草ぶきではあったけれども、そのふき方と材料が小麦のからあったことが近所のとは少し違ってゐた上に、瓦をのせた庇が四方についてゐたが、多くの農家にはそれが無く、庇があっても前のほうだけであったかと思ふ。四方びさしといふものは、むかしは、なみの農家には許されなかったのださうで、その時代の家がまだそのままになってゐたのであらう。・・・家のなかのことをいふと、かなりの家でも、畳の敷いてあるのは「お座敷」だけで、あとはたいい藁のむしろが並べてあったらしい。私の家に無いのでおもしろく思ったのは、太い大黒柱とそのわきの大きな「ゐろり」とであった。ゐろりの上にまっ黒になった自在鉤で茶釜のかけてあるのも、珍しかった。それから、湯どのといふものが無くて、風呂桶を土間において湯をわかす。どうかすると家の外ですることもある。うちで風呂をたてなかった時、そ

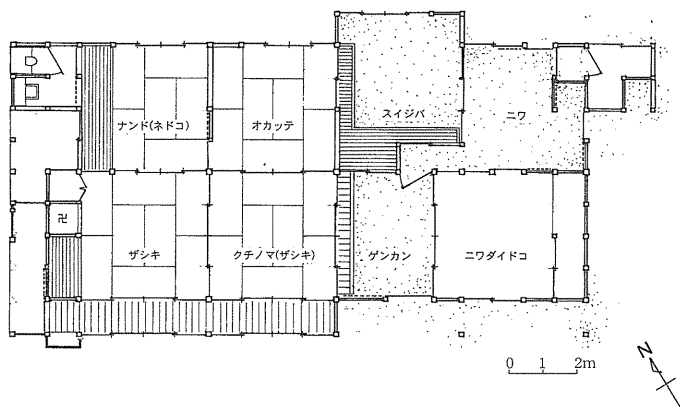


図1 津田左右吉の生家 現状平面図



図2 津田左右吉の生家外観（昭和35年）

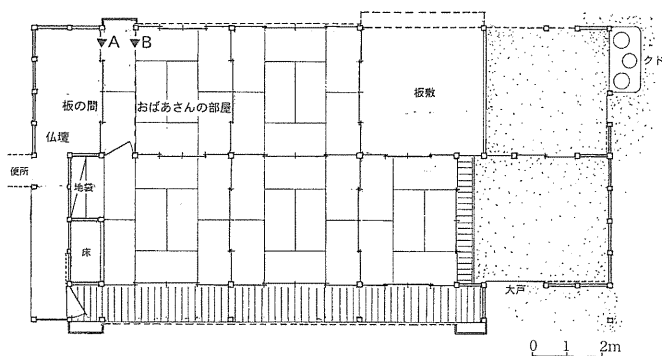


図3 津田左右吉の生家 復原平面図

の湯に入りに行くことがあったが、秋風のもう寒くなったころ、その野天のふろに入っていると、竹やぶの竹のからからと鳴る音のしたことを思ひ出す。風呂をたてると拍子木をうって近所に知らせる家もあった。座敷には、床の間に天照大神宮とか八幡神社とかいふやうな神社の名を書いた幅が幾つもかけてあり、北画ふうといっってはぎょうさんらしいが、そんなやうな山水画のまねをした変な絵のかいてある「からかみ」のたっているのが、どこの家でも同じ座敷のしつらひであった。これは、親しくしてゐた一、二の家へ毎年正月の「おせつ」(新年の宴会)に招かれたので、父について行くことがあったその時に、見て知ったことである。」

太い大黒柱とその脇の大きなイロリ、イロリの上の真っ黒になった自在鉤、床の間に張られた神社の札、津田少年に「山水画のまねをした変な絵」と見破られた襖絵、露天風呂の肌寒さ、「からから」という竹やぶのざわめきなど、目にし、耳にし、肌に感じたさまざまな事物が綴られている。好奇心に満ちた少年の目線を感じる記述からは、ほのぼのとした山村の風景を思い浮かべることができるだろう。

脳裏に浮かぶ情景をほうふつとさせるこの記述の魅力は、津田の描写力によることはもちろんである。しかし少年時代の津田を取り巻いていた環境の豊かさと、それを受けとめる津田少年の感性によるところも大きい。また、屋根の葺き材の違い、四方に庇が回る構成、畳敷きの居室など、住居の格式に関わる記述も注目される。武士としての格式を表象したこれらの特徴は、子どもの知識のみでは理解できないものである。おそらく父から言い聞かされたものだろう。

栃井村で生まれた津田は、武家の時代や名古屋の屋敷を知らない。ただし、名古屋の屋敷に倣った住まいでの津田家の生活は、決して楽ではなかったものの従前の延長にあった。農村に暮らすが「ひやくしょう」ではない。そのような生活のあり方を、津田家の住まいは表していたのだといえる。そして周辺の農家との違いを目にし、その理由を

聞かされて、津田少年は、自分の住まいの示す意味を理解した。ただし農家にある太い大黒柱と大きな囲炉裏の存在に興味をそそられる津田少年のまなざしは、あくまでも好奇心豊かな少年のものに他ならず、身分の相違に根ざすものではない。

一方で、自宅を特徴づけるはずの、土間の広さの違いについてはまったく言及しない。勉学に没頭していた津田の日常には、家内労働的な農作業が存在しなかったのかもしれない。目にしていたはずの土間は関心の及ぶ範囲ではなかったともいえる。ましてや土間の広さの相違が意味する生活の相違は、彼の視野にはなかっただろう。

また、祖母の寝室の描写は、現存建物とうまく整合しない。津田の記憶では「家の一番奥の六畳がおばあさんの部屋になってみて、その奥に二間に一間の板の間があり、そこに長持ちだのつづらだのが雑然と置いてある。そのうちの三尺四方の一区画が板で仕切られてみて」仏壇とされていたという。つまり祖母の寝室（図-1のナンド）は六畳であり、さらに西には「二間に一間の板の間」が続いていた。

解体前の建物には図-1のAの位置に建具が立っていた。解体の結果、かつてBの位置に建具があった時期があり、それも二次的な改修によるものと判断された。明治10年代の状態は判別しがたいが、Aの状態であれば祖母の寝室は八畳となり、Bの状態であれば板の間は六畳となり、いずれも記述と合わない。壁に閉ざされ採光も少ない祖母の部屋は、おそらく津田にとって訪れることの少ない空間だったのではないか。記述と実態の不整合は、そのために生じたのだろう。

土間の広さの相違や、雑然と物の置かれた暗い板の間の広さは、建物の平面を理解することにより可能になる部分が大きい。自叙伝の記述と実際の建物との比較から、津田少年の空間認知の程度をも知ることができる。なにより自叙伝の記述は、歴史学者、津田左右吉の原風

景ともいうべき当時の津田少年を取り巻く家族環境、住環境、自然環境をほうふつとさせる。さらに、地方に定着した士族の暮らしぶりを知ることができる貴重な証言となっている。

記録として良質な自叙伝は、良質な感性がもたらす日常の記憶にはかならない。ただし文章の記述のみではわからないことが多いのも事実である。幸いにして建物が現存し、空間を図化して正確に把握できるために、津田の記憶は追認できた。そして記憶の確かさと不確かさをも確認できたのである。

3 大学生の描く出身小学校

鈴木は建部謙治（愛知工業大学）と協力して、学校で火災が発生した場合に子どもたちが適切な避難経路を選択し、安全に避難することができるかどうかを調べてきた³⁾。その一つの条件として子どもたちが校舎の全体像をどの程度把握しているかを知るために、小学生に手書きの校舎を描かせてきた。基本的にはA3版の白紙に自由に校舎を表現させる自由描画法であるが、表現能力の劣る低学年では校舎の輪郭線だけを与える一部統制法を用いている。

この結果はかなり興味深い。すなわち、自分のクラスルームを中心に校舎内の日常の行動範囲がかなり明確に表現されるからである。入ったことのない教室は表現されないし、通ったことのない階段や廊下も表現されない。低学年であれば、使用頻度の少ない理科室、家庭科室、図工室などの特別教室はほとんど認知されていないし、高学年でも昇降口と自分の教室を結ぶ階段以外の階段の認知率は低い。

目的は異なるが同様の手法でこれまで200人近くの大学生に、かつて自分の通った小学校をフリーハンドで図で表現するよう求めてき

た。小学生の場合と異なるのは過去の空間経験を思い出して描くということである。多くの学生は最初は戸惑うが、2～30分もたつとこの作業にのめり込む。ここで紹介するのは、そこで描き上げられた特徴的なマップである。

ケース1：芸術工学部2年生女子（図-4）

この女子学生の場合は、学校全体を空中から見下ろした鳥瞰図として表現しているところが特徴的である。この図法で描こうとする場合には、立体的な空間把握力と表現技術が必要である。4階建ての校舎と外部空間との関係や遊具の配置が分かりやすく描かれている。校舎内部の描写はほとんどされておらず、もっぱら外部の記憶が描かれている。池や花壇、飼育小屋、敷地周辺の植栽の表現など植物や動物への関心がうかがわれる。全体として伸び伸びとしたラインとバランスの良い構成からは健康的な小学校での生活を思い起こさせる。

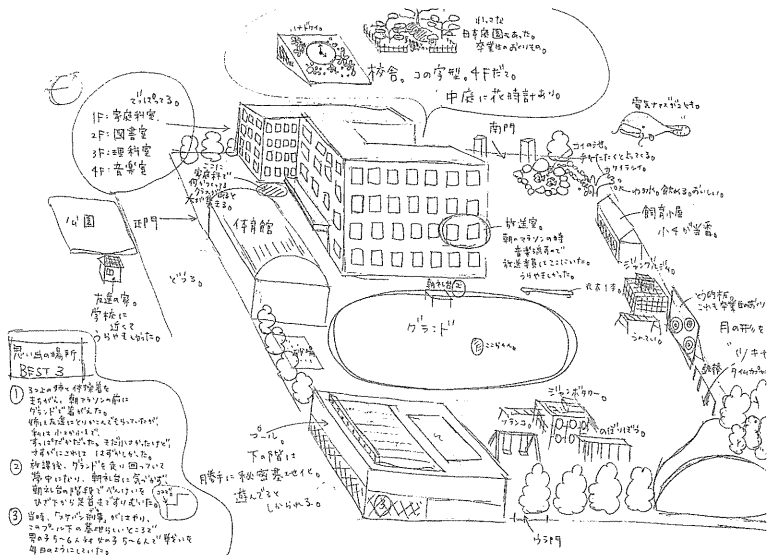


図4 芸術工学部2年生女子

ケース2：芸術工学部2年生男子（図-5）

この学生の場合は、図法として見た場合ややバランスが悪く全体像をつかみにくい。図中に「ここも覚えていない」、「こんなに遠くない」などの走り書きが見られ、描写しながら記憶と図の不整合に悩んでいる様子が分かる。しかしながら、あちこちに書き込まれたコメントが物語るように、学校の中の様々な場所を舞台とした子どもらしい遊びや活動を想像することができ楽しく眺めることができる表現である。

ケース3：教育学部3年生男子（図-6）

描かれた図から推測すると、この学生の通った小学校は矩型の敷地の北側に2階建てと3階建ての校舎と体育館があり、南側に運動場が配置されたきわめて標準的な学校であると考えられる。淡々と描かれた全体像は、図として大きな破綻がなく整合しているが、それだけに情報量の少なさが目につく。他の学生が時間の許す限り思い出の数々を書き込もうとするのに対して書き込むべきことが思い出されずかえって時間をもてあましたよ

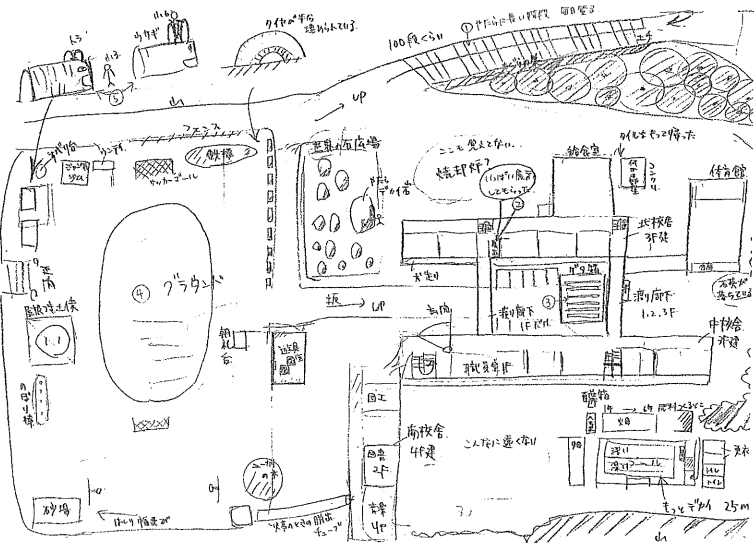


図5 芸術工学部2年生男子

うだ。

特に校舎内部の描写はきわめて事務的であり、階段と廊下が表現されるだけでこの図からは小学生の生き生きした楽しさは伝わってこない。わずかながらの救いは外部空間の描き込みである。それでも運動場周辺の植栽、遊具、岩石園、砂場、朝礼台が関連なく描き込まれているだけである。6年間通った学校がこれ程にも早く忘却の彼方へと捨て去られてしまうとしたら悲しいことである。

ケース4：芸術工学部3年生女子（図-7）

学校の全体像を正確に表現している点と、内部空間・外部空間とも偏りなく表現されている点、方位を認識している点で全体として整合性が高い手書き図である。特に北側の校舎のように、廊下の一部が雁行しただけで突然図としてのつじつまがあわなくなることが多いにもかかわらず、破綻なく完成されている。校舎やグラウンドの平面的なプロポーションも自然であり、空間認識の能力と空間表現能力のバランスに優れている。

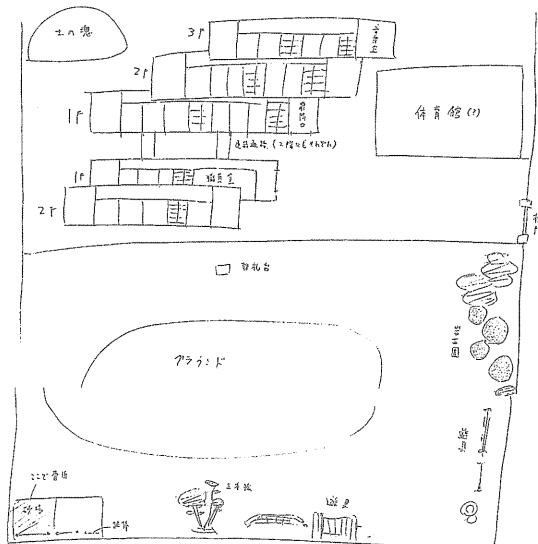


図6 教育学部3年生男子

注意深く見ると、用務員さんの家の犬小屋や、百葉箱、二宮金次郎像、焼却炉といったそこで生活している小学生ならではの記憶が鮮明に描かれている。この1枚の手書き地図は、ある環境の中で1人の女の子が子どもらしい6年間の生活を過ごしてきたという事実が記録として示されたと考えられる。

ケース5：教育学部4年生女子（図-8）

このケースは、図としてはケース4に比べて稚拙さが目立つ。平面的な表現と断面的な表現が同時に混在し、図学的な意味での図法としてはルール違反である。しかし、3階建て2棟、4階建て1棟から構成される校舎の全体像を表現する手法としては分かりやすい方法である。各学年4クラスという今となっては大規模校でありながら、クラス毎の部屋配置や特別教室の位置などがかなり詳細に描き込まれているのが特徴である。

さらにいくつか書き加えられたコメントからは、小学生時代の生活の一端をかいま見ることができる。「よくお茶をとりに行った」用務員さんの

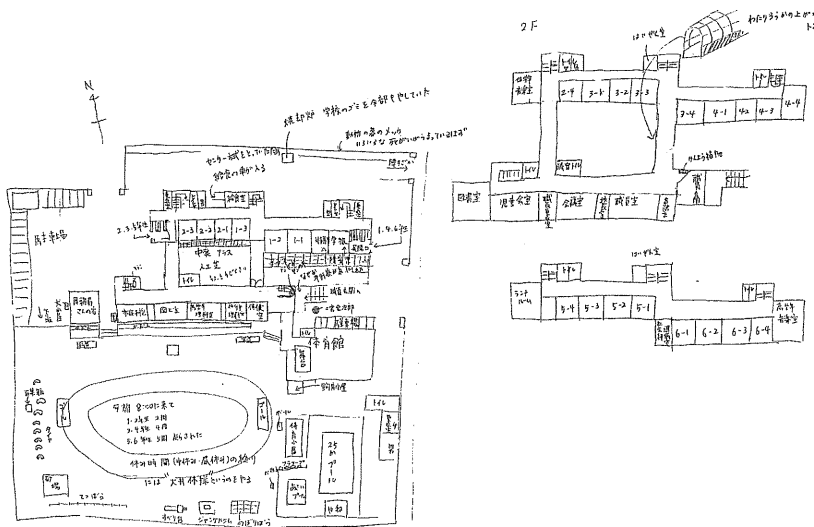


図7 芸術工学部3年生女子

部屋や、「レコードや楽器を自由に使うことのできた」音楽室、「野性のすずめが迷い込んできた」鳥小屋など、個人的な体験にもとづく場所への愛着を知ることができる。一方で「花子さんのうわさがあり一度も入らなかった」トイレや、「夜中に赤くなる」という池の存在は、不確かな恐怖心と場所の結び付きを示しており、子どもらしい場所へのたくましい想像力を感じさせる。

幸せな少年少女時代を過ごした人なら誰でも、小学校の思い出を饒舌に語ることが出来る。同窓会はいつでも思い出話しでもちきりである。小学校時代に起こった出来事はついさっき起こったことのようにしゃべったり、文章として表すことが出来る。しかし、学校の校舎がどうであったかということについては、断片的な部屋のつながりを語るか、その様子を形容詞で表現する程度が限界である。

建築（もの）を設計する行為において「図」はなくてはならない伝

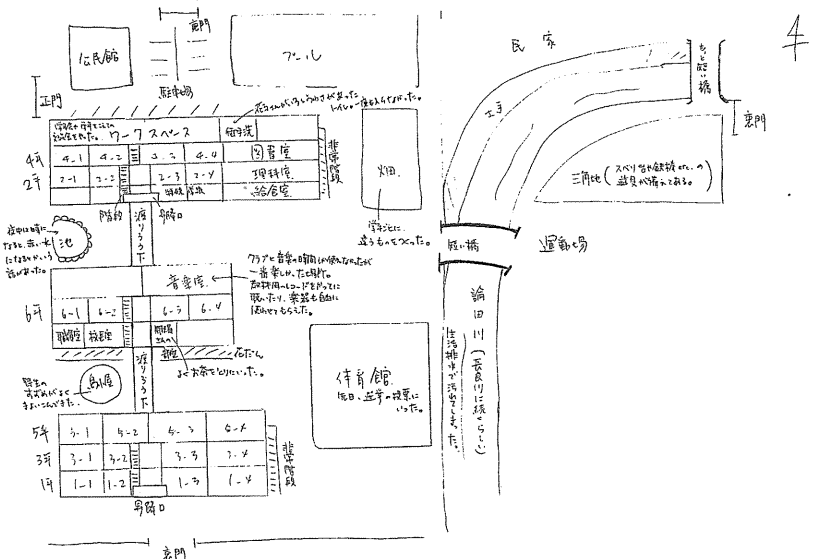


図8 教育学部4年生女子

達手段となっている。建築には形があり、形は「図」で表現する以外に適切な方法がないからである。例えば、目の前に置かれたコップの形を、図を用いなくて正確に伝えることはきわめて困難をとまなう。しかしあるルールに基づいた図法を用いることにより目の前のコップの形はかなり正確に伝えることが出来る。同様に校舎の部屋配置も図で描けばきわめて容易に伝わる。

とは言うものの大学1年ならわずか7年前、2年なら8年前に6年間も通い詰めた場所であるにもかかわらず、きわめて鮮明に思い出される場所と、全く思い出せない場所が同時にあることに本人たちは気が付く。記憶の濃淡をつなぐためにはしばらく時間がかかる。これに成功する学生もいれば、思い出せずに描き込めない学生もいる。

いずれも1時間程度の作業であるが、完成された小学校の情報量は個人個人で意外に大きなものがある。校舎の外形さえ不確かな学生がいるかと思えば、ひとつひとつの教室名すべてを書き込む学生もいる。殺風景な校舎しか再現できない学生もあれば、楽しかった小学生時代を彷彿とさせる表現の出来る学生もいる。その情報量の多さは表現手法によらない。しかも図化された記録は、情報を瞬時に一覧できるのである。

4 親子の描く通学路

以下で紹介する事例は、名古屋市千種区にあるU小学校の5、6年生の子どもとその親が描いた通学路（家から小学校までの地図）である。鈴木は1998年より毎年、小学生とその親を対象とした環境デザインワークショップを行っている。このワークショップでは、学区の現状を知る街歩きや、学区の将来を語る街デザインの作業を行いなが

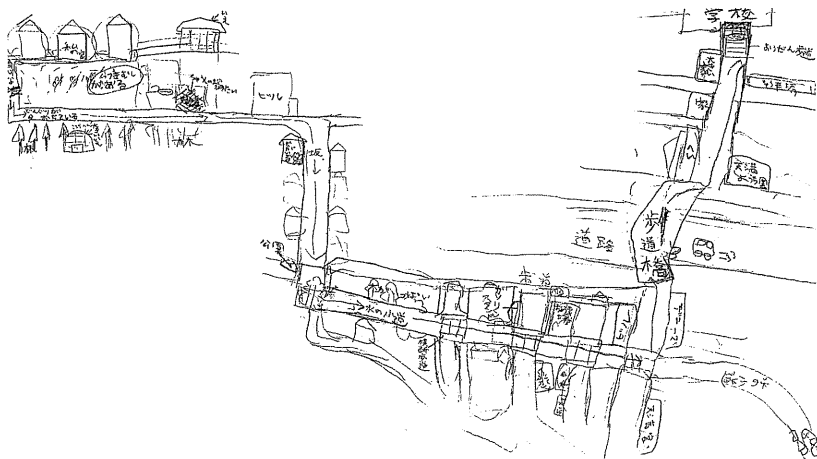
ら、身近な生活環境の大切さを再確認しようとしている。そうした作業の流れのなかで、地域のイメージマップとして通学路を描くのである。作業の手順は簡単である。A3版の紙に鉛筆で家から学校までの道のりを表現するのである。表現方法や描くためのルールは一切伝えていない。

ケース1：小学校6年女子と父親の場合（図9-1、9-2）

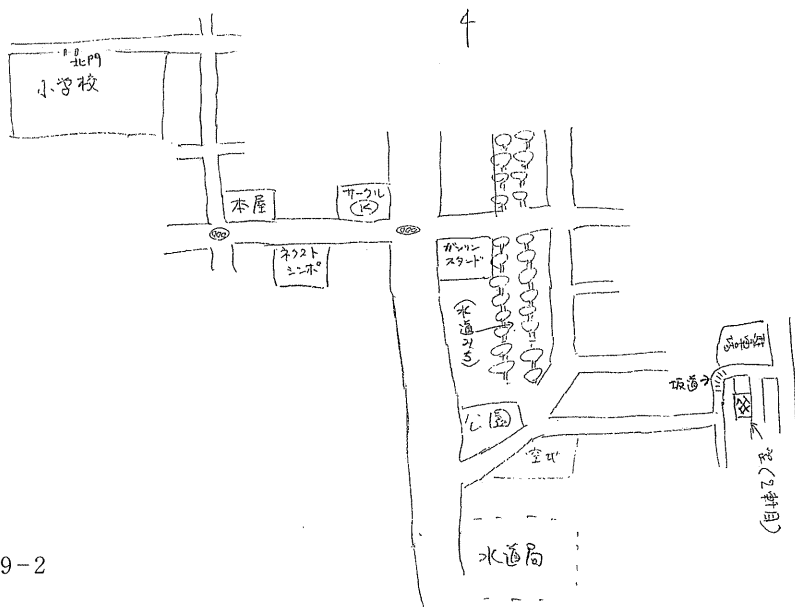
子どもの描いた通学路は典型的なルート・マップの表現形式である。自宅から学校までの道のりが、直線的な関係で丹念に描かれている。位置関係や距離感に関する正確さはないが、通学路に沿った両側に展開する建物や風景に関する情報がていねいに表現されている。加えて他の道路と交差する部分に描かれた横断歩道のゼブラマークや歩道橋はいかにも通学路らしい要素として無意識に誇張されているようである。これに対して父親の描いた地図は、自宅と小学校の位置関係や方位道路のつながり方の精度は、子どもに比べてはるかに高い。しかしながら、地図上に表現された情報量は子どもに比べるとはるかに少ない。しかも明らかに幹線道路が中心に描かれており、歩行者の視点から表現された地図ではなく、車での移動による地図ととれる。子どもが消しゴムで消しては描き、描いては消して悪戦苦闘の末地図を完成させているのに対して、短時間で迷いなく描いている様子も読み取れる。

ケース2：小学校5年男子と父親の場合（図10-1、10-2）

この親子の場合は、父親が転勤族のため日本各地を転々としておりこの地での居住歴も1年に満たない。5年生の男の子の描いた地図は、一定の面的な広がりの中で自宅と学校を表現しようとしているが、描写方法が稚拙で全体としてわかりにくい地図となっている。また描かれている情報も、近所の工事中の高校（本人いわく騒音に悩まされている）、模型店、友人の家、公園と、きわめて限定的である。右下のゾーンは、「知らないのでかけません」となぐり書きがされている。一方、父親のイメージマップ



9-1



9-2

図9 小学校6年女子と父親の場合（9-1が子ども、9-2が父親）

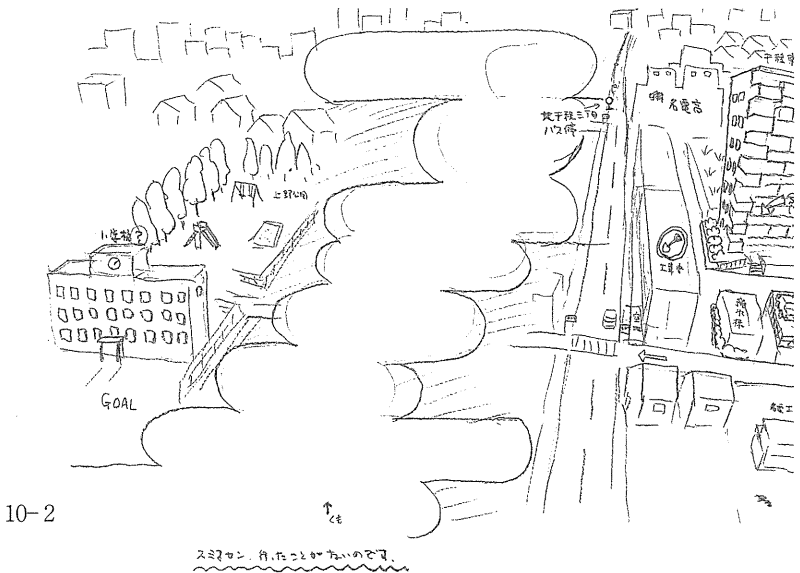
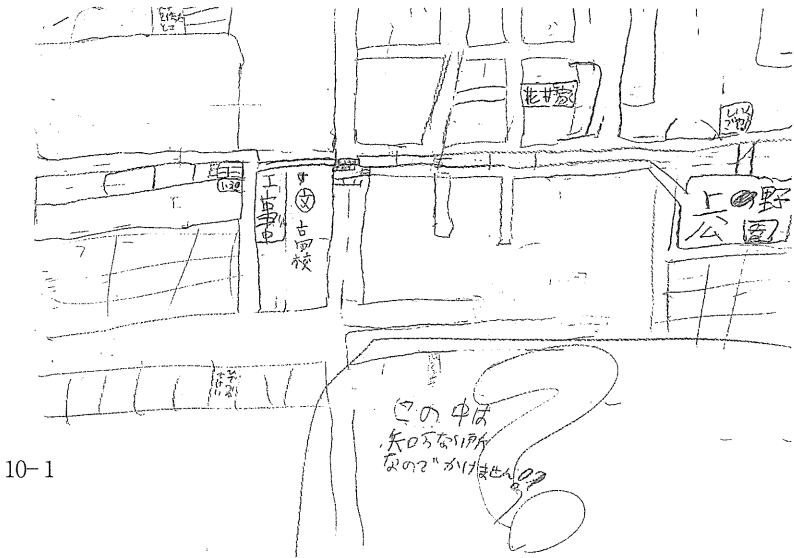


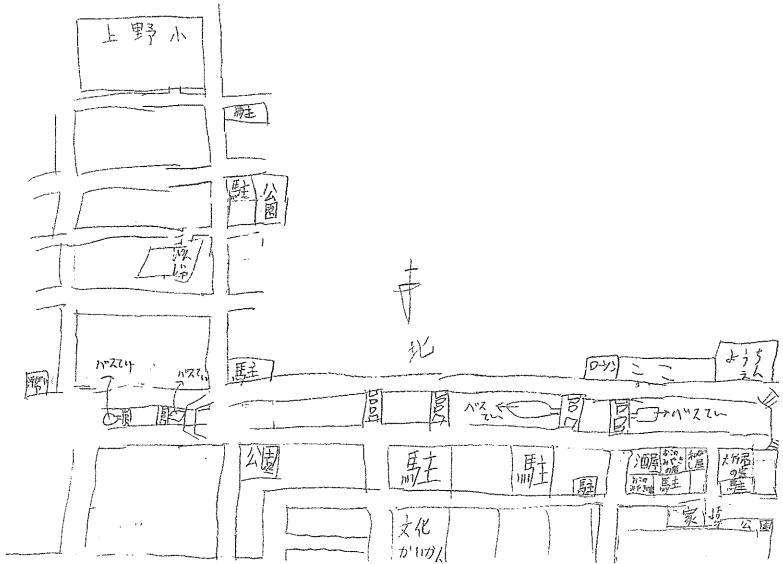
図10 小学校5年男子と父親の場合 (10-1 が子ども、10-2 が父親)

は、空から描く鳥瞰図のスタイルをとっており、きわめてユニークである。しかしながら、具体的に描かれているのは自宅周辺と、学校周辺の一部に限られており、自宅と学校をつなぐ部分は「行ったことがない」として、雲で覆われてしまっている。特に自宅のある集合住宅周辺からバス停にかけては、細部に至る形態まで表現されているが故に、空白部分が際立っている。自宅と職場を往復するという限定的な生活行動が想像される。

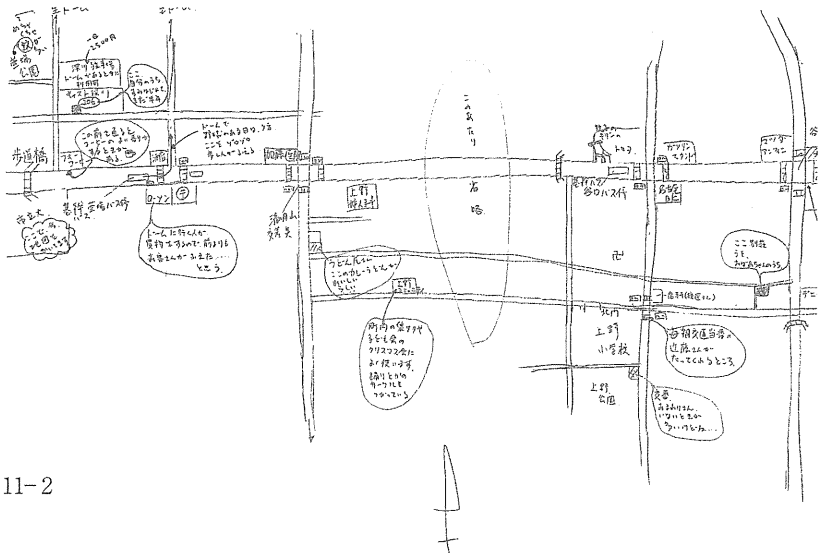
ケース3：小学校5年男子と母親の場合（図11-1、11-2）

5年生の男の子の描いた地図は、通学路を中心とした道路を骨格として、自分の知る範囲を面的に表現している。方位記号を記入していることから、方位を認識していることがわかる。しかしながら、北を画面下方としており、スタンド・ポイントは自宅にあることを示しており、自己中心的な視点と客観性の入り交じった空間認知の発達段階の表現と考えられる。画面の左右に抜ける幹線道路にはほぼ正確な位置に、歩道橋や横断歩道が描かれており歩行者としての視点が見え隠れする。幹線道路をどこで渡るかが大きな関心事のようである。あちこちに示された駐車場の位置がどんな意味を持つのか、現時点では不明である。さて、母親の地図であるが、おおむね正確な地図表現に加えて様々な文字情報が書かれているのが特徴である。前の父親の描いた地図とは異なり母親らしい地域に密着した生活情報が盛り込まれているのである。すなわち、銀行、内科医院、歯科医院、婦人科、郵便局、交番、レストラン、うどんや、ガソリンスタンド、コンビニエンスストア、コミュニティセンターなど、父親とは違う地域での生活の広がり想像させるに充分である。

以上、3組の親子が描く自宅から学校までの地図を分析した。表現の巧拙はともかくも、表現手法の違いが空間のとらえ方の違いを示したり、表現内容の違いが地域での生活の違いを示していることがわかる。特に子どもの描く地図は、大人の場合と異なり個性的でユニークであることが特徴であった。たとえば縮尺、方位、記号といった図法



11-1



11-2

図11 小学校5年男子と母親の場合 (11-1 が子ども、11-2 が母親)

としての地図の書き方のルールが身につけていないために個性的な表現がなされるからである。また描かれる対象地域をどのくらい知っているか、どのくらい出歩いているかの程度がよく反映されるからである。

よく知られているように子どもは発達段階に沿って一定の空間認知能力を身に付ける。たとえば小学生低学年では一般的にルート・マップ的な表現が多く出現するが、高学年に向けて徐々にサーヴェイ・マップ的な表現がされることが多いのは、空間認知能力の発達を端的に表わす。ルート・マップでは自己が移動する動線の順序にしたがって表現されるが、サーヴェイ・マップでは方位や距離による座標系をベースに面的な広がりの中で位置関係が正確に表現されるようになる。

一方、方位や距離感など一定の空間認知能力を身につけた大人にとっては、表現された地図の精度はもっぱら対象となる空間をどの程度知っているかどうか依存する。言い替えれば、日常生活とその空間の関連性の深さに大いにかかわると考えられる。

よほど小さな子どもか痴呆の症状のあるお年寄りでなければ、あるいは他の地域から引っ越してきたばかりでなければ、歩ける範囲の自宅周辺で道に迷うことはまずないであろう。一定の空間構造が頭の中にインプットされているからである。しかしながら、この日頃何気なく生活している自宅周辺をいざ地図に表してみようとしても簡単にはいかない。場所によって記憶に濃淡があったり、道路や建物などの関係に不整合が生じたりする。インプットされているはずの空間構造がいかに断片的なものであり全体性を保持していないかを思い知らされる。

記憶の全体像を紙面に整合性を維持しながら表現しようとする努力

が精度の高い記録につながっていく。現在の身近な空間の場合は、記憶にもとづき現在居住している自宅周辺の精度の高い記録がなされたかどうか、すなわち空間構造に関する記憶修復の結果の是非は、現地に出かけることにより簡単に確認することが出来る。ということは、これを図に表す作業は記憶をビジュアルに表現しながら、記憶と記憶の関係を修復し再構築するプロセスに他ならない。あるいは記憶の濃淡を確認する作業でもある。

5 地図の要らない村・描くには当たり前の家

中国安徽省休寧県の齊雲山は、明代以来の道教の霊場である。海拔585mの玉屏峰を背にして北に断崖が落ち込む急峻な地形のわずかな平坦地に集落は展開している（図-12）。週末には多くの参拝客が訪れるものの、村の普段の人口は120人程度である。

1995年、溝口は安徽省休寧県での伝統民居の民俗学的調査を行ったが⁴⁾、齊雲山では、村の子ども3人に「あなたの家」「あなたの村」を描いてもらった。自分の住まいや村に対する子どもたちのイメージを知るための試みである。表現方法や描くためのルールは一切伝えず、2時間ほどをかけている。まずは、子どもたちの描いた家の絵をみよう。

ケース1：程真釵くん 14才（図-13）

程真釵くんは村長である程さんの息子。父・母・3人の姉がいる6人家族の末っ子である。村長は、村の中核となる道教寺院の太素宮を見下ろす位置、風光明媚な高台で食堂を経営しているが、路地をはさんだ食堂の脇に村長宅はある。

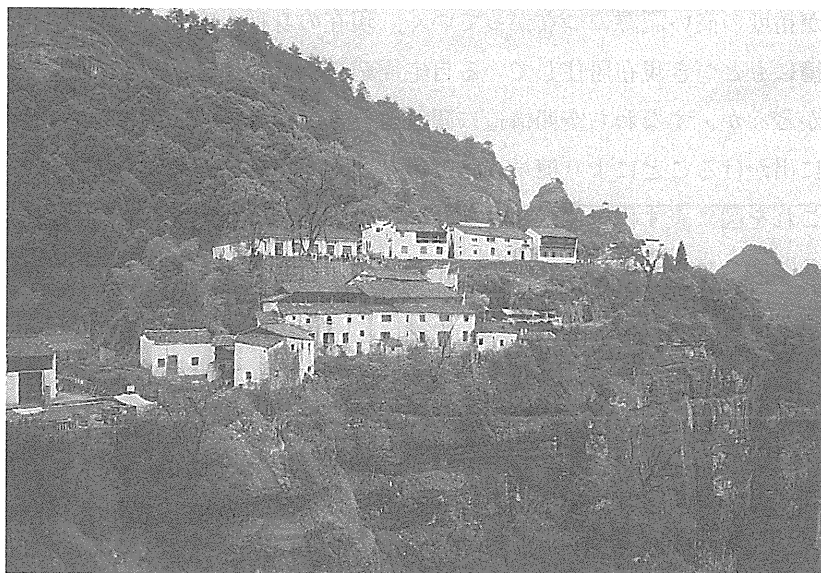


図12 齊雲山集落中心部の景観



図13 程真釵くんの家

程くんが描いたのは家の正面である。実際の建物より若干横幅が広く描かれており、中央にある入口もかなり大きい。背景には、南に連なる山並みが描かれ、山際に雲がたなびいている。

ケース2：汪致富くん 14才（図-14）

汪致富くんは、調査対象家屋となった汪冬久さんの四男である。冬久さんは、道士（道教の僧侶）であるとともに、山の畑で茶を栽培している。汪冬久宅は、村のほぼ中央に位置し、メインストリートに面して建つ。一帯は東下がりの斜面で敷地は通りから一段高く、住宅の前面を俯瞰する場所はない。

汪くんが描いたのは家の背面である。家の裏は一段高い畑地である。そこに佇み家を描いたのだろう。鳴門状の雲が多く描かれる。下界を望む家の立地を示している。厨房の扉の描写が丁寧である。

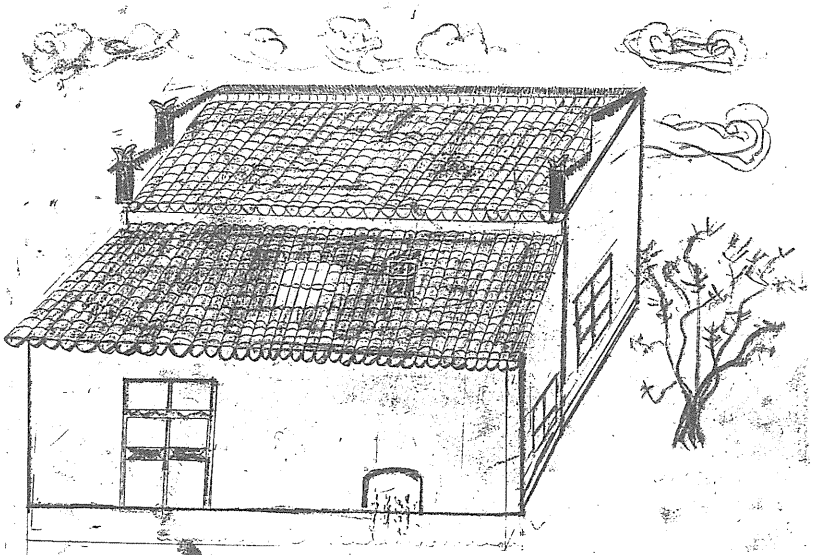


図14 汪致富くんの家

ケース3：王培林くん 14才（図-15）

王培林くんは、汪致富くんの友達で、二人仲良くいっしょに描いていた。近所に住んでいるという（少し北にある王家であろう）。馬頭牆（両妻に立ち上がる卯建状の壁）の描写が他の二人に比べて丹念である。薄墨色の外壁四隅が塗られ、棟の瓦の装飾も描かれている。右端に樹木を描く点は汪致富くんと同じである。ただし厨房の扉の位置や側面の窓の有無が汪致富くんとは異なっており、両家の相違をきちんと認識していることが分かる。一方、雲は描かれない。

規模や開口部の大きさに若干の差異はあるが、齊雲山村の住宅は平面・外観ともに、著しく画一的である（図-16）。日本と比較した場合、中国の農村部は家族・社会の規範が明確で、生活の基盤となる家のイメージも強固であるから、いきおい住宅は普遍的となる。ここ齊雲山では、ことさらその傾向が強い。また、かつて日本でも見られたよう

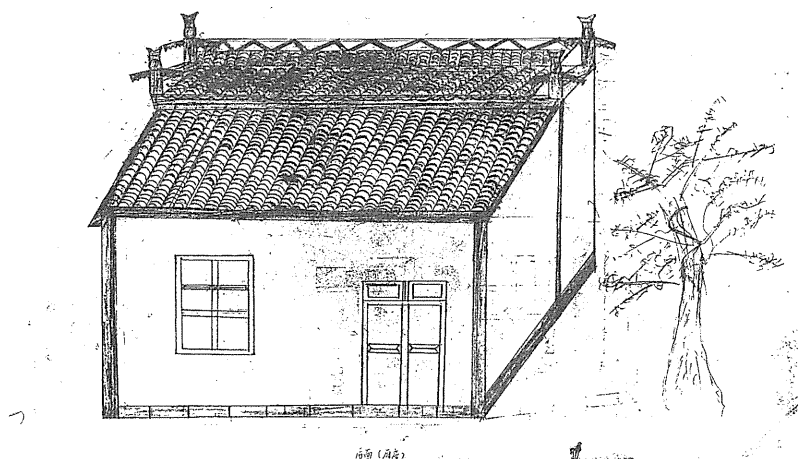


図15 王培林くんの家

に、住宅の建設は村人自らが行ない、友人や親戚が協力する。このような生産システムも、家が類似する一因である。

3人の絵に共通して描かれる馬頭牆は、江南漢族の住まいに多く見られ、特に徽州の民家の特徴ともなっている。馬頭牆の有無は、住まいの格に関わる問題である。また、視線は3人とも山から谷へとという向きである。この土地の方位観は、山から谷へと向かっており、家は山を背にして谷に向かって建てるのが風水的にも吉だという。太素宮をはじめとして、集落の主要な軸線も山から谷へと向かう。地形に根ざす村の空間構造をこれらの絵は示しているようにも思える。

次には、村長の息子、程真釵くんが描いた村の案内図（図-17）をとりあげよう。登山道の始まりである麓の登封橋から村までを描いた案内図は、典型的なルート・マップ形式といえる。

断崖絶壁に突き出す尾根筋に張り付くように集落が展開する斉雲山



図16 斉雲山村の住宅（汪冬久宅、左手に居室が増築されている）

を平面に図化するのには難しい。麓から村までは一本道で、名所を巡って紆余曲折を経るその道筋は、さながら双六のようでもある。観光案内図も、麓から村までの道のりをリニアに記したルート・マップ形式である（図-18）。

しかしパンフレットに描かれた絵と比較すれば、程くんの視線がみえてもくる。パンフレットは見せたい名所が中心で、個々の描写も類型化されている。程くんの図は、今は基壇のみが残る洞天福地の現状、微妙な建築の描き分けなど、個々の描写はより実態に近い。一方で程くんの図は村に近づくほど大きく描かれており、この点ではパンフレットが実態により近い。

村の小学校は低学年までで、高学年になると、村の子どもたちは麓の学校へ通うから、麓までの道のりを知らないわけではない。村までの道行きの途中、道ばたで楽しく遊ぶ子どもたちに出くわす。あるいは親と一緒に茶摘みに従事する子どももいる。村の周辺は、子どもたちの世界である。この距離のゆがみと情報の粗密は、彼の等身大の空間感覚を示しているのである。

そもそも、この村では平面上の距離はほとんど意味がない。むしろ重要なのは、道筋と、徒歩でかかる時間である。村人に景勝地までの距離を聞けば、「慣れないあなたたちならば××分かかるだろう。」といった具合となる。斉雲山では、自己が移動する動線の順序にしたがって表現されるルート・マップがあればよく、方位や距離による面的な広がりの中で位置関係が表現されるサーヴェイ・マップは必要がない。むしろ座標系を至上とする我々の空間把握の常識の危険性を示しているようでもある。

さて、村を描くという試みは、「村を描くより、眼下に広がるすばらしい風景を描いたほうがよい。家を描くのもいいが、みんな同じだ

ぞ。」という村長の意向から、子どもたちが村から見た風景を描いてしまい、客観性を持たなくなった。イタリアの山岳都市を思わせる集落景観も、村人には当たり前の風景であり、興味の対象とはなり得ないのだろう。

村の建物は確実に新陳代謝しており、生活も少しずつ変化している。しかし斉雲山では、みんなが顔見知りであり、村人にいざこざがあれば、村長が調停に入る。未だに強固な地域社会が現存する斉雲山で、村や家は、図化して確認するには、あまりに身近な存在なのかもしれない。住人にとって村は、地図が要らないほど身についており、自ら建てる家は描く必要がないほど普遍的なものなのだろう。

集落配置図を作成する行動を、村の風水を乱すこととして、快く思わない村人もいたという。風水を信じ「危険な絶壁が多くとも、神に守られているわが村では、谷に子どもが落ちてでも死人は出ないのだ。」と自慢する人々にとって、村の空間は身体の一部であり、客体化する存在ではないのだろう。人間の感覚を調査の対象とすること自体が、きわめて近代的、科学的な行為である。そのような行為が必要ない社会は、健全な社会でもある。

6 図化を通して考えること

社会のあり方を大局的に論じることは重要である。しかし身の回りの事象を大括りにして論じることは、個々の事象を切り捨てていく作業でもある。一見些末とも思われる個々の事例に隠された物事の本質を、時には見失ってしまうこともあるだろう。むしろ「日本の生活環境は」と論じる前に、等身大の視線で「わたしのまち」「わたしの住まい」とは何なのかと自身に問いかけることに、さまざまな問題解決の

糸口がありそうである。

生活環境のイメージを図化することは、あいまいな記憶を記録として定着させる作業である。そして図化されたものは、さまざまなことを語りかけてくれる。大人の場合、図化を通して、普段は気づかないことを発見し、身近な生活環境の重要性を再認識する。そして自身への問いかけが始まる。また社会の鏡としての子どもが描く一見稚拙な絵は、子どものおかれている生活環境を暗示する。図化を通して、背後にある社会のさまざまな特徴や問題点が明らかになるのである。なにより、イメージの豊かな絵を生みだす社会は、創造力の豊かな、素敵な社会でもある。

註記

- 1) 『津田左右吉全集』第24巻所収、岩波書店1965
- 2) 平成9年の調査については、溝口正人・野々垣篤「美濃加茂市近代農村住宅の事例的考察」(美濃加茂市文化財調査集録 第3集、1998. 3、PP.15-25)を参照。この建物は平成11年に所有者の意向で取り壊されることとなり、美濃加茂市が解体し、別途敷地を充当して移築保存することとなった。解体後の知見は、設計指導を要請された溝口の見解である。
- 3) このことに関しては『芸術工学への誘い』リバティ書房、1997、PP.145-165、第Ⅱ部第3章「小学校の廊下の多様化と融合」で触れた。
- 4) 平田昌司編『徽州方言研究』好文出版、1998(中文)、p.310-335、第五章「村庄和民居」(溝口分担)を参照。『芸術工学への誘い』リバティ書房、1997、PP.166-197、第Ⅱ部第4章「住まいの空間構造を読み解く」で概要を報告した。なお聞き取り調査では、平田昌司先生(京都大学)・木津祐子先生(当時同志社女子大学、現在京都大学)に多大な協力をいただいた。両先生に深く感謝したい。